

俳句の解釈と鑑賞事典

成城大学教授

尾形 仿編

落花枝に帰ると見れば胡蝶かな

山路来て何やらゆかしすみれ草

よく見れば薺花咲く垣根かな

行く春や鳥啼き魚の目は涙

梅一輪一輪ほどの暖かさ

大原や蝶の出で舞ふ朧月

春の海終日のたりのたりかな

菜の花や月は東に日は西に

妹が垣根三味線草の花咲きぬ

目出度さもちう位なりおらが春



句の解釈と鑑賞事典

成城大学教授
尾形 侑
編

旺文社

は し が き

俳句、この五・七・五というわずか一七音節の、世界一短い詩。それは、その形の愛らしさにも似ず、日本文化を代表する一つに数えあげられています。なぜでしょうか。

その理由については、いろいろ考えられますが、一口にいえば、それは日本の自然的・精神的風土の中から庶民の文芸として、広い国民的支持のもとにはぐくみ育てられてきたものだからだ、ということが出来るでしょう。

日本人は一億総詩人といわれるぐらい、だれもが日常おりに触れ胸に浮かぶ感懷を、この愛すべき小さな詩形に託してきました。それは、五・七・五というシンプルな詩形とリズムとが、日本人の生理に適していたからにちがいありません。そうしてそれら無数の作品の中でも、この四季の変化の著しい島の風土の中で生活を営んできた日本人の生の感覚の根柢にことに深く触れたものが、古来名句として広く人びとの間に親しまれ愛誦されてきたのです。

すべて詩は人間の心の傷みの産物といわれますが、それら名句の数々が、時として私どもの胸の中に、何か日本人の心のふるさとといったなつかしい響きを伴ってよみがえってくるのも、そのさりげなく日常の哀歎をうたった小さな詩形の中に、日本の風土に生きた先人たちの心の傷みが深く刻みつけられているからだといつていいでしょう。その何ともいえないなつかしい響きが私どもの心に安らぎと慰藉を与えてくれるのは、私どもの胸の中にもまた、潜在的にその響きに共鳴する無弦の琴が蔵されているからだといえます。

けれども、私どもがその響きに限らないつかしきをおぼえながらも、時として私どもは、その詩的内容について私どもが勝手に理解したつもりでいる解釈がはたして当たっているのだろうかという不安にかられたり、あるいはその内容がよくつかめないもどかしさにさいなまれたりすることがあることも、また否定できません。その魅力に強く心を引かれ、また、漠然^{ぼくぜん}とはわかったような気がしながらも、しかし、ほんとうにはよくわかったと言ひ切れる自信が持てない。それが俳句に接するときの、大方の共通した感想だろうと思います。

そこでこの書物では、私どもに与えられた国民的文化遺産ともいふべき古今の名句を選び、専門の研究者や実作者による鑑賞を掲げるとともに、鑑賞の手引きとなるさまざまな事項を加え、俳句の理解と検索の便に供することにしました。

あらゆる文学作品がそうであるように、俳句にもまた唯一絶対の正解といったものは存在しません。作品は常にこれを愛する読者により新しい解釈を加えられることによって成長してゆくものなのです。もしもこの書物が、皆さんの胸の中で皆さん自身の新しい正解を導き出してゆく上に、身近な伴侶^{はんりよ}として役立つことができたとしたなら、編者としてこれにすぎる喜びはありません。

なお、この書物の編集については、山下一海氏の絶大な協力にあずかりました。この書物の編集意図を汲んですぐれた鑑賞を寄せられた執筆者各位の労とあわせて、深く感謝の意を表したいと思います。

一九七九年三月

執筆者紹介

- | | | | |
|-------|-----------------|---------|-----------------|
| 乾 裕 幸 | 帝塚山学院大学教授 | 中野 沙 恵 | 東京女子医科大学講師 |
| 井上敏幸 | 福岡女子大学助教授 | 平井照敏 | 青山学院女子短期大学教授、俳人 |
| 上野さち子 | 山口女子大学教授、俳人 | 広田二郎 | 専修大学教授 |
| 瓜生鉄二 | 早稲田実業高校教諭 | 堀 信 夫 | 神戸大学助教授 |
| 遠藤誠治 | 武蔵高校教諭 | 松 崎 豊 | 俳人 |
| 尾 形 仂 | 成城大学教授 | 丸 山 一 彦 | 宇都宮大学教授 |
| 鍵和田袖子 | 関東学院女子短期大学講師、俳人 | 宮坂 静 生 | 信州大学助教授、俳人 |
| 上月乙彦 | 神戸学院女子短期大学教授、俳人 | 村松友次 | 東洋大学短期大学教授、俳人 |
| 小室善弘 | 浦和西高校教諭、俳人 | 森 田 蘭 | 四国女子大学教授、詩人 |
| 桜井武次郎 | 親和女子大学助教授 | 矢島 渚 男 | 上田高校教諭、俳人 |
| 佐藤和夫 | 早稲田大学教授、俳人 | 矢島 房 利 | 習志野高校教諭、俳人 |
| 清水孝之 | 愛知県立芸術大学教授 | 山 下 一 海 | 成城短期大学教授 |
| 白石悌三 | 福岡大学教授 | | |
| 高橋庄次 | 相模女子大学短期大学部教授 | | |

略年表・季語集・俳人の系譜 執筆協力

小針玲子 宿利弥生 松崎好男

(五十音順)

凡 例

1 本書では、国民詩として広く愛誦あいしやうされてきた、俳句史上代表的な俳人一六五名の作品六六二句を取り上げ、その鑑賞の手引きを試みた。

2 項目は、「室町の俳諧と貞門・談林」「蕉風直前の俳諧と蕉風」「中興期の俳諧」「化政・天保期の俳諧」「子規派の俳句」「虚子・碧梧桐の時代」「昭和前期の俳壇」「戦後の俳壇」「文人俳句」の九区分のもとに各俳人を配列した。同一俳人の句の配列は原則として制作年順とした。ただし制作年の不明な場合は四季別に配列した。各項目の初めに俳人の略歴を記した。

3 掲出句の形態・表記は

* 近世の句は、読みやすさを考慮し適宜、漢字・かなをあてかえ、送りがなを補った。

* 近現代の句は作者の用字を尊重し出典の表記に拠った。ただし字体は当用漢字体とした。

難読文字・旧かなづかいには、新かなづかいによるふりがなを（ ）に入れて施した。（ ）のないものは出典にあるふりがなである。なお

出典は句の下に示した。

- 5 季語は▼を付して示し、初・仲・晩・兼三の別を記した。句切れは▼を付して示し、切れ字を指摘した。ただし、伝統的に切れ字と規定されているものに限った。語釈は▽を付して示した。
- 6 『句解』では、句のイメージや情感の大略を平易な言葉で示し、『鑑賞』で、詳細な鑑賞を試みた。また『補説』では、鑑賞本文を補足した。
- 7 主な俳人については、その項目の最後に『参考文献』を付記した。なお、俳諧・俳句総体についての参考文献は、付録に一括して掲げた。
- 8 本文各所に、参考記事を囲みの形態で載せた。書名・雑誌名には『』、作品名・論文名には「」を付した。
- 9 近代の年号表記には明・大・昭の略号を用いたものもある。(明28)は明治二八年を示す。
- 10 本文中の引用句・引用文にはへゝを付した。必要に応じて現代かなづかいによるふりがなを施し、また、近世の引用句・引用文については掲出句と同様、適宜あてかえを行った。文中の敬称はすべて略した。
- 11

目次

はしがき

室町の俳諧と貞門・談林

山崎宗鑑

手をついて(二六) 月に柄を(二七)

荒木田守武

飛梅や(二七) 落花枝に(二八)

松永貞徳

鳳凰も(二九) しをるは(三〇)

野々口立圃

天も花に(三〇) あらはれて(三一)

松江重頼

やあしぱらく(三一) 生魚の(三二)

安原貞室

これはこれと(三三) 松にすめ(三四)

北村季吟

地主からは(三五) まざまざと(三六)

田捨女

雪の朝(二六)

西山宗因

井原西鶴

ながむとて(三七) いかに見る(三七)
となん一つ(三八)

蕉風直前の俳諧と蕉風

池西言水

猫逃げて(三三) 菜の花や(三三) 朝霧や(三三)

木枯の(三三)

椎本才磨

符折りて(三四) 猫の子に(三四) 時雨そめ(三五)

夕暮の(三五)

上島鬼貫

春の水(三六) 庭前に(三七) そよりとも(三七)

行水の(三八) 冬枯れや(三八)

小西来山

ほのかなる(三九) 白魚や(四〇) 春の夢(四一)

行水も(四一)

山口素堂

目には青葉(四二) 唐土に(四三) 市に入つて(四四)

松尾芭蕉

春や来し(四四) 姥桜(四四) 夏の月(四五) あら何

ともなや(四七) 枯枝に(四七) 櫓の声波ヲ(四八)

芭蕉野分して(四九) 髭風ヲ吹きて(五〇) 世にふる

も(五〇) 野ざらしを(五一) 猿を聞く人(五一) 道

のべの (三三) 馬に寝て (三四) 秋風や (三五) 曙
 や (五六) 狂句木枯の (五七) 海暮れて (五八) 春
 なれや (五九) 山路来て (六〇) 辛崎の (六一) よく
 見れば (六二) 古池や (六三) 名月や (六四) 君火を
 たけ (六五) 花の雲 (六六) 養虫の (六七) 旅人と (六八)
 鷹一つ (六九) いざさらば (七〇) 何の木の (七一) 充
 春の夜や (七二) ほろほろと (七三) 一つ脱いで (七四)
 若葉して (七五) 草臥れて (七六) 蛸壺や (七七) 草
 の戸も (七八) 行く春や (七九) あらたふと (八〇) 蚤
 風流の (八一) 夏草や (八二) 五月雨の (八三) 蚤
 虱 (八四) 閑かさや (八五) 五月雨を (八六) 暑き日
 を (八七) 象潟や (八八) 荒海や (八九) 一つ家に (九〇)
 早稲の香や (九一) 塚も動け (九二) あかあかと (九三)
 石山の (九四) 蛤の (九五) 初しぐれ (九六) 木のも
 とに (九七) 四方より (九八) 行く春を (九九) 先た
 のむ (一〇〇) 頓て死ぬ (一〇一) 京にても (一〇二) 病雁
 の (一〇三) 海士の家は (一〇四) から鮭も (一〇五) 住み
 つかぬ (一〇六) 山里は (一〇七) 衰ひや (一〇八) 梅若
 菜 (一〇九) 不精さや (一一〇) ほととぎす (一一一)
 憂き我を (一一二) 五月雨や (一一三) 物いへば (一一四)
 三井寺の (一一五) 鶯や (一一六) 塩鯛の (一一七) ほと
 とぎす (一一八) 白露も (一二〇) 金屏の (一二一) 梅が
 香に (一二二) 春雨や (一二三) 麦の穂を (一二四) 五月
 雨の (一二五) 六月や (一二六) 清滝や (一二七) 秋ちか
 き (一二八) ひやひやと (一二九) びいと啼く (一三〇)
 菊の香や (一三一) この道や (一三二) この秋は (一三三)

白菊の (一三三) 秋深き (一三四) 旅に病んで (一三五)
 榎本其角 一三六

日の春を (一三六) 初霜に (一三七) 切られたる (一三八)
 この木戸や (一三九) 名月や (一四〇) 声かれて (一四一)
 夕立や (一四二) 越後屋に (一四三) 鶯の (一四四) 鐘ひ
 とつ (一四五)

服部嵐雪 一四五

不座女の (一三五) 出替りや (一三六) 名月や (一三六)
 竹の子や (一三七) 蒲団着て (一三七) 梅一輪 (一三八)

杉山杉風 一三六

子や待たん (一三九) がつくりと (一四〇) 馬の頬 (一四〇)
 振りあぐる (一四一)

山本荷兮 一四二

木枯に (一四二) 陽炎や (一四三)

坪井杜国 一四三

このごろの (一四三) ゆく秋も (一四四) 足駄はく (一四四)
 散る花に (一四五)

越智越人 一四四

行燈の (一四六) 雁がねも (一四六) うらやまし (一四七)
 御代の春 (一四七)

斎部路通 一四六

鳥どもも (一四八) いねいねと (一四九)
 河合曾良 一五〇

卯の花を (一五〇) よもすがら (一五一)

立花北枝……………一五

焼けにけり(一五) 川音や(一五) 馬洗ふ(一五)
池の星(一五)

向井去来……………一五

振舞や(一五) 郭公(一五) 岩鼻や(一五) 鳶の羽
も(一五) 木枯の(一五) 鉢たたき(一五) 尾頭
の(一五) おうおうと(一五)

野沢凡兆……………一五

灰捨てて(一五) 花散るや(一五) 鶯や(一五) 鶯
の巢の(一五) 髪剃や(一五) 渡りかけて(一五)
市中は(一五) 灰汁桶の(一五) 初潮や(一五) 禅
寺の(一五) 門前の(一五) しぐるるや(一五) 下
京や(一五) 呼かへす(一五)

内藤丈草……………一六

大原や(一六) 春雨や(一六) 我が事と(一六) 陽
炎や(一六) 時鳥(一六) 一月は(一六) まじはり
は(一六) うづくまる(一六) 鷹の目の(一六) 水
底を(一六) 下京を(一六) 淋しさの(一六)

森川許六……………一六

梅が香や(一六) 卯の花に(一六) 涼風や(一六)
十団子も(一六) 茶の花の(一六) 御命講や(一六)
大名の(一六) 寒菊の(一六)

浜田洒堂……………一六

日の影や(一六) 花散りて(一六) 高土手に(一六)
人に似て(一六)

志太野坡……………一五

長松が(一五) 行く雲を(一五) 山伏の(一五) 小
夜しぐれ(一五)

広瀬惟然……………一七

梅の花(一七) 水鳥や(一七)

服部土芳……………一八

棹鹿の(一八) かげろふや(一八)

斯波園女……………一九

鼻紙の(一九) 冴ゆる夜の(一九)

各務支考……………一九

馬の耳(一九) 食堂に(一九) 船頭の(一九) 歌書
よりも(一九)

岩田涼菟……………一九

風の(一九) それもおう(一九)

中川乙由……………一九

浮草や(一九) 諫鼓鳥(一九)

稲津祇空……………一九

秋風や(一九) 野鳥の(一九)

中興期の俳諧……………一九

秋色……………一九

井戸端の(一九)

横井也有……………二〇

蠅が来て(二〇) 二三枚(二〇)

次 千代女……………一〇二

紅きいた(一〇二) 朝顔に(一〇三) 月の夜や(一〇四)

目 与謝蕪村……………一〇四

古庭に(一〇四) 柳ちり(一〇五) 水桶に(一〇六) 夏河

を(一〇七) 離別れたる(一〇八) 春の海(一〇九) 鮎く

れて(一一〇) 夕露や(一一一) 稲妻や(一一二) 鳥羽殿

へ(一一三) 楠の根を(一一四) 宿かきぬ(一一五) 難波

女や(一一六) 行く春や(一一七) 物焚て(一一八) 年守

るや(一一九) 不二ひとつ(一二〇) 人の世に(一二一)

桃源の(一二二) うぐひすの(一二三) 高麗船の(一二四)

牡丹散て(一二五) 斧入して(一二六) 山は暮れて(一二七)

菜の花や(一二八) 花いばら(一二九) 愁ひつつ(一三〇)

狐火の(一三一) 齒齡に(一三二) 行く春や(一三三) 水

仙に(一三四) 白梅や(一三五) 月今宵(一三六) 梅遠

近(一三八) 鶯の(一三九) 春もやや(一四〇) 山蟻

の(一四一) 鮎ずしや(一四二) 淋しさに(一四三) 梅散

るや(一四四) 妹が垣根(一四五) 春雨や(一四六) 畑打

つや(一四七) 公達に(一四八) 冬鶯(一四九) しら梅

炭 太祇……………一四五

山路きて(一五〇) やぶ入りの(一五一) ふらここ

の(一五二) ふり向けば(一五三) 東風吹くと(一五四)

行く女(一五五) 脱ぎすてて(一五六) 初恋や(一五七)

寐よといふ(一五八) 寒月や(一五九) 盗人に(一六〇)

冬枯や(一六一)

黒柳召波……………一五三

浴して(一五三) 傘の(一五四) 冬こもり(一五五) 憂き

ことを(一五六)

吉分大魯……………一五五

牡丹折りし(一五五) 初時雨(一五六) ともし火に(一五七)

河内女や(一五八)

高井几董……………一五七

湖の(一五九) 冬木立(一六〇) 絵草紙に(一六一) 門口

に(一六二)

大島蓼太……………一六一

世の中は(一六一) 馬借りて(一六二)

堀 麦水……………一六三

椿落ちて(一六三) 郭公(一六四)

勝見二柳……………一六四

小海老飛ぶ(一六四) 白ぎくや(一六五)

高桑闌更……………一六五

枯れ蘆の(一六五) 鵜の面に(一六六)

三浦 樗良……………一六七

山寺や(一六七) さくら散る(一六八) すかし見て(一六九)

嵐吹く(一七〇) かりがねの(一七一) 立円の(一七二)

加藤 暁台……………一七三

ゆきどけや(一七三) 火ともせば(一七四) うぐひ

すや(一七五) 日くれたり(一七六) 夕顔の(一七七)

蚊ばしらや(二五五) 風かなし(二五五) 九月尽(二五六)
秋の山(二五七) 暁や(二五八)

秋蝶夢……………二五八

一夜一夜(二五九) 風や(二五九) うづみ火や(二六〇)

加舎白雄……………二六〇

人恋し(二六一) 子規(二六一) 菖蒲湯や(二六二) めく

ら子の(二六三) 吹尽し(二六三) 鶏の薺に(二六四) 氷

る夜や(二六四) をかしげに(二六五)

松岡青蘿……………二六五

はる雨の(二六六) 角上げて(二六六) 蘭の香も(二六七)

戸口より(二六八) 松風の(二六八) 灯火の(二六九)

化政・天保期の俳諧……………二七〇

大伴大江丸……………二七〇

秋来ぬと(二七〇) ちぎりきな(二七一)

井上士朗……………二七一

足輕の(二七一) 木枯や(二七二)

夏目成美……………二七三

魚食うて(二七三) 蠅打って(二七三)

鈴木道彦……………二七四

ゆさゆさと(二七四) 家二つ(二七五)

建部巢兆……………二七五

梅散るや(二七六) 江に添うて(二七六)

小林一茶……………二七七

三文が(二七七) 夏山や(二七八) 櫓の葉の(二八九) か

すむ日や(二九〇) 夕燕(二九〇) 古郷や(二九一) 田の

雁や(二九二) 米蒔くも(二九三) 有明や(二九四) 是が

まあ(二九五) 春雨や(二九五) 人來たら(二九六) 秋風

に(二九七) むまさうな(二九八) 雪とけて(二九九) 大

根引き(三〇〇) 涼風の(三〇〇) 瘦蛙(三〇一) ひいき

目に(三〇二) 次の間の(三〇三) 目出度さも(三〇四)

雀の子(三〇五) 麦秋や(三〇六) 蟬なくや(三〇七) 蟻

の道(三〇七) 露の世は(三〇八) 秋風や(三〇九) 椋鳥

と(三〇〇) 雪ちるや(三一一) とにかくも(三一二) づ

ぶ濡れの(三一二) やれ打つな(三二三) ちる芒(三三五)

やけ土の(三三五)……………三三六

成田蒼虬……………三三六

蓬萊の(三三七) 江のひかり(三三七)

田川鳳朗……………三三六

暮遅き(三三八) 紙燭して(三三九)

桜井梅室……………三三九

元日や(三三九) 冬の夜や(三三〇)

市原たよ女……………三三二

日のさすや(三三二)

子規派の俳句……………三三三

正岡子規……………三三三

あたたかな(三三三) 赤蜻蛉(三三三) 行く我に(三三四)

柿くへば(三三四) 元日の(三三五) 行く秋の(三三五) し

ぐるるや(三三六) 小夜時雨(三三七) いくたびも(三三八)
つり鐘の(三三九) 三千の(三三九) ある僧の(三四〇)
この頃の(三四一) 鶏頭の十四五本も(三四二) 五月雨
や(三四三) 鶏頭ノ(三四四) 鬚剃ルヤ(三四五) 活きた
目を(三四六) 糸瓜咲て(三四七) をととひの(三四八)
内藤鳴雪(三四九)
初冬の(三五〇)
伊藤松宇(三五〇)
繫かれし(三五二)
松瀬青々(三五三)
甘酒屋(三五四)
石井露月(三五五)
一宿に(三五六)
松根東洋城(三五七)
黛を(三五八) 渋柿の(三五九) 静けさや(三六〇)
青木月斗(三六一)
春愁や(三六二)
虚子・碧梧桐の時代(三六三)
村上鬼城(三六四)
野を焼くや(三六五) 鬪鶏の(三六六) 生きかはり(三六七)
瘦馬の(三六八) 蛤に(三六九) 冬蜂の(三七〇)
高浜虚子(三七一)
遠山に(三七二) 桐一葉(三七三) 金亀子(三七四) 春風
や(三七五) 鎌倉を(三七六) 大空に(三七七) 秋天
の(三七八) 白牡丹(三七九) この庭の(三八〇) 流
れ行く(三八一) 筈木に(三八二) 襟巻の(三八三) 道の
べに(三八四) たとふれば(三八五) 手毬唄(三八六) 天
地の(三八七) 枯菊に(三八八) 虹立ちて(三八九) 一塊
の(三九〇) 山国の(三九一) 敵といふもの(三九二) 初
蝶来(三九三) 茎右往左往(三九四) 彼一語(三九五) 去
年今年(三九六) 明易や(三九七) 牡丹の(三九八) 蜘蛛
に生れ(三九九) 春の山(四〇〇) 独り句の(四〇一)
大須賀乙字(四〇二)
雁鳴いて(四〇三)
白田亜浪(四〇四)
鶴の(四〇五) 木曾路ゆく(四〇六)
嶋田青峰(四〇七)
出でて耕す(四〇八)
渡辺水巴(四〇九)
天渺々(四一〇) かたまつて(四一一) ひとすぢの(四一二)
飯田蛇笏(四一三)
芋の露(四一四) たましひの(四一五) をりとりて(四一六)
くろがねの(四一七) 夏雲むるる(四一八) 命尽き
て(四一九)
原石鼎(四二〇)
花影婆娑と(四二一) 秋風や(四二二) 青天や(四二三)
前田普羅(四二四)
三六六

春尽きて (三六)	駒ヶ嶽 (三七)	乗鞍の (三八)	種田山頭火	まつたく雲がない (四四)	おちついて (四五)	四〇五	
長谷川かな女	羽子板の (三八)	三六八	尾崎放哉	咳をしても (四六)	春の山の (四六)	四〇五	
阿部みどり女	日と海の (三八)	三六九	中塚一碧楼	能登が突き出で (四七)	病めば蒲団のそと (四八)	四〇七	
富安風生	よろこべば (三九)	まさなる (三九)	昭和前期の俳壇	四〇九		四〇九	
赤富士に (三九)	三九		水原秋桜子	葛飾や (四九)	梨咲くと (四〇)	啄木鳥や (四〇)	四〇九
杉田久女	足袋つぐや (三九)	舒して (三九)	風に落つ (三九)	墓ないて (四一)	萩の風 (四二)	滝落ちて (四二)	四二
吉田冬葉	岩なだれ (四〇)	四二	高野素十	方丈の (四三)	蟻地獄 (四四)	また一人 (四五)	生
竹下しづの女	短夜や (四〇)	四二	阿波野青畝	案山子翁 (四六)	なつかしの (四七)	葛城の (四七)	四二六
富田木歩	我が肩に (四五)	四五	山口誓子	流水や (四八)	夏の河 (四九)	つきぬけて (四〇)	四二八
河東碧梧桐	赤い椿 (三六)	空をはさむ (三六)	芒枯れし (三七)	曳かれる牛が (三八)	椿をおろせし (三八)	老妻若	四二八
萩原井泉水	やぐと見る (三九)	四二	山口青邨	祖母山も (四三)	みちのくの (四三)	外套の (四四)	四三三
伏して哭す (四〇)	力一ぱいに (四一)	空をあ	川端茅舎	しぐるゝや (四五)	金剛の (四五)	ひらくと (四六)	四三五
ゆむ (四二)	咲きいずるや (四二)	遠くたしか	まひくや (四七)	花杏 (四七)	朴散華 (四八)		
に (四三)	残る花は (四三)						

次 後藤夜半……………四九

滝の上に (四九)

目 山口草堂……………四〇

痛病めば (四〇)

右城暮石……………四〇

水中に (四二)

篠田悌二郎……………四二

蘆刈の (四二) 鮎釣や (四三)

橋本多佳子……………四三

笔りたる (四三) 白桃に (四三) 月一輪 (四四)

三橋鷹女……………四四

子に母に (四四) 白露や (四五) 葛枯れて (四六)

高浜年尾……………四六

遠き家の (四六) 野分雲 (四七)

永田耕衣……………四七

夢の世に (四七)

中村汀女……………四八

あはれ子の (四八) 雨粒の (四九) 外にも出よ (四九)

中村草田男……………四九

降る雪や (四九) 蟾蜍 (四九) 妻ニ夕夜 (四九) 万

緑の中や (四九) 勇氣こそ (四九) 焼跡に (四九)

加藤楸邨……………四九

露の中 (四九) 雉子の眸の (四九) 死や霜の (四九)

綾織の (四六) 木の葉ふりやまず (四六) 原爆図
中 (四七)

石田波郷……………四八

バスを待ち (四八) 顔出せば (四八) 秋の夜の (四八)

霜の墓 (四八) 雪はしづかに (四九) 螢籠 (四九)

皆吉爽雨……………四九

夜焚火人の (四九)

星野立子……………五〇

しんしんと (四九) 女郎花 (四九)

大野林火……………五〇

蝸牛 (四九) おむりても (四九) 風立ちて (四九)

福田蓼汀……………五〇

福寿草 (四九)

松本たかし……………五〇

羅を (四九) 我庭の (四九) 夢に舞ふ (四九)

長谷川素逝……………五〇

馬ゆかず (四九) しづかなる (四九)

石橋秀野……………五一

蟬時雨 (四九)

吉岡禪寺洞……………五一

海苔買ふや (四九) 一握の (四九)

日野草城……………五一

ところてん (四九) こひびとを (四九) ひとりさ
す (四九)

芝不器男	四六五
あなたなる (四六五) 麦車 (四六六)	
横山白虹	四六六
雪霏々と (四六六)	
西東三鬼	四六七
水枕 (四六七) 広島や (四六八) 秋の暮 (四六九)	
秋元不死男	四六九
クリスマス (四六九) 鳥わたる (四七〇)	
平畑静塔	四七〇
徐々に徐々に (四七一)	
富沢赤黄男	四七二
蝶墮ちて (四七二)	
三谷 昭	四七三
暗がりに (四七三)	
桂 信子	四七三
鯛あまたいる (四七三)	
橋本夢道	四七四
無礼なる妻よ (四七四)	
戦後の俳壇	四七五
次 安住 敦	四七五
てんと虫 (四七五)	
橋本鶏二	四七六

鷹の巢や (四七六)	
細見綾子	四七六
鶏頭を (四七七) 女身仏に (四七七)	
中島斌雄	四七八
子へ買ふ焼栗 (四七八) 爆音や (四七八)	
石川桂郎	四七九
柚子湯して (四七八) 遠蛙 (四八〇)	
石橋辰之助	四八〇
朝焼の (四八一)	
加倉井秋を	四八一
食卓の (四八二)	
篠原 梵	四八二
閉ぢし翅 (四八三)	
高屋窓秋	四八三
山鳩よ (四八三)	
能村登四郎	四八三
暁紅に (四八四)	
角川源義	四八四
ロダンの首 (四八四)	
香西照雄	四八五
あせるまじ (四八五)	
野見山朱鳥	四八六
曼珠沙華 (四八六)	

次 目

石原八束	四六	内田南草	四八
くらがりに (四七)		靴の底に (四八)	
沢木欣一	四七	文人俳句	四九
塩田に (四七)		尾崎紅葉	四九
西垣脩	四八	猿曳の (四九)	
さやけて (四八)		夏目漱石	五〇
原子公平	四九	腸に (五〇) 有る程の (五〇)	
戦後の空へ (四九)		内田百閒	五二
森澄雄	四九	こほろぎの (五二)	
除夜の妻 (四九) 蹟にて (四九)		久保田万太郎	五三
飯田龍太	五一	新参の (五三) 新涼の (五三) あきくさを (五三)	
紺緋 (四九) 父母の亡き (四九)		室生犀星	五三
上村占魚	五一	青梅の (五四) 鯛の骨 (五四)	
晩涼の (四九)		久米正雄	五五
野沢節子	五三	魚城移るにや (五五)	
冬の日や (四九)		芥川龍之介	五六
藤田湘子	五四	木がらしや (五四) 水涕や (五七)	
枯山に (四九)		瀧井孝作	五六
高柳重信	五四	真赤なフランネルの (五八)	
船焼き捨てし (四九) たてがみを刈り (四九)		永井龍男	五六
金子兜太	五六	シャボンのせて (五九)	
霧の村 (四九) 人体冷えて (四九)		石塚友二	五二〇
市川一男	五七	百万に (五二〇)	
おのが面に (四七)			